

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 姜 信和

論文題目 尹東柱の脱神話化

—トランスナショナルな視座からの再読—

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 田所光男  
委 員 名古屋大学教授 飯野和夫  
委 員 名古屋大学教授 長畑明利  
委 員 名古屋大学教授 浮葉正親

# 論文審査の結果の要旨

## 本論文の概要

本論文は、尹東柱の詩作品を、〈倦怠〉、〈生活〉、〈窺視〉という三項を軸に読み解いて、民族的抵抗の詩人という通説を再検証しようとするものである。

尹東柱は、1917年、日本統治下の満州・間島に生まれ、日本留学中に治安維持法によって逮捕され、1945年福岡刑務所で獄死している。この夭折したハンゲル詩人の遺した詩作品は多くはないし、特に、日本滞在中のものはわずかである。しかし尹東柱は、韓国において、戦後現在まで一般社会でも人気が高い詩人であり、また研究世界でも数多くの業績が生み出されてきた。その評価の核心は、民族的抵抗の詩人というところに求められている。しかし、そういう評価には、尹東柱の上のような実人生の軌跡が強い影響を及ぼしており、果たして詩作品そのものの読解が十分に行われた上でのことであるのか、疑問の余地が大きい。とりわけ問題となるのは、韓国内の知的風土というよりは、東アジア一帯のトランスナショナルな知的空間である。そこでは、相互補完的に〈抵抗詩人〉という民族的ステレオタイプが生じているように考えられる。ここでいう相互補完的な民族主義とは、日本と韓国のように、一方は侵略戦争の加害者、他方は被害者となった二つの国で、前者の自国批判と、後者の自国賛美が相互に刺激しあい鼓舞しあうナショナリズムである。尹東柱は、民族をめぐるこうした言説空間に読まれることが多かった。というのも、尹東柱の人生は、植民地期の犠牲者として夭折した非業の生涯として、強いインパクトをもったからであり、戦後、その詩は、もっぱらそうした歴史的・社会的文脈で読まれてきたのである。

本論文は、歴史認識の考察に尽力した先行の諸研究の成果を継承しつつも、植民地期の犠牲者というテキスト外的な情報に過度に依拠しがちの解釈からは距離をとって、尹東柱の詩作品を内在的に読むことで、新たな文学的評価の地平を開くことを目的とする。方法的には、文学的な影響関係の検討を重視する。尹東柱は、ハンゲルや日本語の詩作品、ツルゲーネフやキルケゴールの著作等、非常に広い文学的関心を持ち、また20世紀前半の学術の動向にも敏感であった。こうした側面を注視して、テキスト連関の解明を試みる。考察の軸となるのは、「倦怠」と「生活」という一対の言葉と、〈窺視〉というイメージであり、どれも、〈抵抗詩人〉という通念にはあまりそぐわない対象である。

以下、各章ごとにその概要を説明する。

第一章では、メディアや国語教育の現場で世襲的犠牲者意識を増幅させるテキストとして尹東柱を取り上げる韓国、漠然とした贖罪意識を緩和する免罪符のように韓国民族主義的な尹東柱解釈を受容し、集団的な罪責意識の傘下に逃げ込むことで個々の責任を曖昧にする日本、共産主義的イデオロギーを加味して尹東柱を称揚し、再受容しようとする中国東北部、このような、東アジアにおける尹東柱受容の多様な相と、それに対するトランスナショナルな視座からの研究の方向を説明する。また、尹東柱研究がさかんな韓国における詩史と研究史、および日本における研究史を概略する。そしてそれらを踏まえて、本論文を構成する三つの軸となる、「倦怠」、「生活」、〈窺視〉について概念規定を行う。

## 論文審査の結果の要旨

第二章では、「倦怠」の分析を展開する。引用のモザイクともいべき尹東柱の作品には、数多くの詩人からの影響の跡を取り出せるが、その中で特に注目するのは、同時期のアヴァンギャルド詩人、李箱の吸収と変形である。尹東柱がモダニズム詩人、鄭芝溶に親和することは理解されやすいが、李箱の辛辣な皮肉と諧謔に満ちた偽悪的な身振りにも、尹東柱は呼応している。尹東柱は、植民地支配に対する抵抗戦線の聖地ともいわれる間島において、名家の長男としての葛藤を抱いていた。民衆神学としてのキリスト教を基調に、男性中心主義的な家風のなか、進路をめぐる父との衝突があり、疎外感を舐めざるを得なかった。詩語「倦怠」には、家父長制のなかの民族主義的談論と宗主国日本の与えるモダニティとの間で宙吊りにされた、尹東柱のアンビヴァレントな姿が垣間みられる。そしてこうした姿は決して例外的なものではなく、むしろ植民地期インテリの典型とも言えるものである。具体的には、李箱の詩作品である「こんな詩」の題目をもじった尹東柱の詩、「こんな日」を糸口にする。「もの憂い倦怠」という日本語の既存訳の問題性を指摘しつつ、原語の「澄みわたった倦怠」と「乾いた学課」という詩句を掘り下げる。五族協和の「矛盾」と「倦怠」の実相を、当時の社会背景や教育カリキュラムも参考にして検討する。また「倦怠」の様相は、満州・京城・帝都というように、尹東柱の移動に伴って少しずつ変化を見せることになるが、本章では満州と京城における尹東柱の「倦怠」について考察する。

第三章では、内なる「倦怠」を引き受けようとする尹東柱のまなざしが、「生活」への飽くなき観察と相関していることに着目し、そのようにして観察された姿を、〈日常的植民性〉の諸相として考察する。尹東柱は老人、若者、こどもといわず、誰もがみな「包み」を抱え持っていると言い、それは「生活の包み」であり、ありふれた〈生〉を普通に生き抜くことの厄介さの包みであると同時に、「倦怠の包み」なのかもしれないと語っている。ツルゲーネフの「乞食」を踏まえて書かれた散文詩「ツルゲーネフの丘」に描出された、「生活」を追い、それを観察する余計者の「倦怠」の様相について考察する。帝政ロシア社会の矛盾を結果的に暴いた「ツルゲーネフの窃視」というロシア文学研究世界の学説を援用することで、ツルゲーネフと尹東柱の共通面と相違面を解明する。さらに本章では、日本滞在中に書かれ、没収を免れた5篇の詩作品のうち、3篇について検討を加える。

第四章では、尹東柱の〈窃視〉がはらむ多義性について考察する。詩「病院」では、語り手は女の「白い脚」に相手には見られない位置から視線を投げ、その盗み見た「白い脚」を通して〈死〉を透かし見、そうして自らの境遇を女に重ね合わせて終わる。その同一化を図る手法は、見つめる対象のジェンダーを抜きとるものであることを明らかにする。またこの「病院」と対になっている詩「慰労」を取り上げ、そこに登場する蝶におけるジェンダーのゆらぎについても考察する。蜘蛛に肢体をぐるぐる巻きにされた蝶への視線は、官能性の表象に留まるだけではなく、すべての死にゆく者のもつ、ままたらぬ人間の本性或より普遍的な人間社会の暴虐に対する観察へと移行していることを考察する。こうした、性への眼差しから死への眼差しへの移行

## 論文審査の結果の要旨

は、そのまま、生への眼差しへの移行でもあるという両義性を、「序詩」と「十字架」という詩作品を対象に解明する。この二つの詩は、これまで民族主義とキリスト教の文脈を重視して解釈がなされてきたので、こうした先行の見解に対し新たな読みを提出することになる。

第五章では、尹東柱における〈窃視〉の対象が白色の事物であることに注目し、その意味を検討する。尹東柱の〈白〉へのまなざしは、例えば、詩「哀しい同族」の解釈に典型的に表れているように、〈白衣民族神話〉に結びつけられ、朝鮮民族の犠牲や抵抗の精神の象徴として読まれることが少なくない。しかし〈白〉を民族表象の記号としてだけ読みとることは不十分であり、そこでは、より普遍的な主題が追究されている。詩「哀しい同族」の場合も、見られているのは確かに〈白〉を纏う朝鮮女性であるが、その肢体への〈窃視〉を通して、植民地の日常の無為に振りまわされる個人々の生き様の空虚さという、より普遍的なテーマが読みとれるのである。また、詩「また別の故郷」では、「ぼく」と「美しい魂」に対して、「白骨」が民族的文脈を越える意味を担っていることを検討する。〈白〉は死のメタファーであることによって、はかない生を喚起し、日常の無為性と時代の猛威の告発となっていることを解明する。

### 本論文の評価

本論文の学術的価値は、何よりも、尹東柱の生涯にかかかかる歴史的、社会的な文脈に依存して構成されている、民族的抵抗の象徴という詩人像を、詩それ自体の内在的な解釈を突き詰めることで相対化して、尹東柱の詩作品のもつ文学的な広がりや、無媒介の抵抗を讃えがちなナショナリズムには還元されえない方向を汲み出そうとした、その試みに求められる。

この総括的な評価は、以下、三つの高評価項目に分析して説明できる。

まず、民族主義的解釈のもつ問題点を、具体的に、説得力をもって論証したことがある。朝鮮半島の植民地化という歴史的な文脈は、被害者側にとっても加害者側にとってもきわめて重いものであり、治安維持法で拘束され、そのまま獄死するに至った尹東柱を考える時、その大きな文脈への参照は当然である。しかしそうした参照が、詩の解釈にとって桎梏に転化しているのではないか、そうして、尹東柱の詩それ自体のもつ、あるいはもちうる豊かな可能性を損なってしまうのではないか、という議論の展開は説得力もっていた。特に、第五章において、〈窃視〉というイメージや「白」という言葉から、詩「哀しい同族」を分析して、〈白衣民族神話〉から距離をとれたことは、特筆に値する。

次に、民族的抵抗という論点を全否定するのではなく、むしろ、もう一つの抵抗と呼ぶうる内容を取り出せていることも評価できる。尹東柱を帝国主義的侵略への抵抗者とみなす解釈が、ほとんど視野の外に追いやってしまった、尹東柱の詩の言葉やイメージ、すなわち「倦怠」と「生活」という一対の言葉と、〈窃視〉のイメージに注目して、植民体制の規定する日常の「生活」になじめないこと、そういう意味での「

## 論文審査の結果の要旨

倦怠」に、植民地勢力への直接的な抵抗とは異なる、別種の抵抗を見出そうとした議論は、新たな尹東柱解釈として極めて斬新である。

さらにまた、尹東柱の詩の言葉を丹念に検討することによって、尹東柱の詩の言語的な独創性を解明しようとしていることも評価に値する。特に、一見矛盾する、形容詞と名詞の結合を頻繁に行っていること、多用された反語的表現が、尹東柱の詩のディアレクティックな律動を生み出していることなどを解明できている。また、方法として効果的であったのは、間テクスト性の追求である。同時代の朝鮮の詩人たち、とりわけ、李箱、及び日本の文学者や学者たち、さらには、ツルゲーネフやキルケゴール、等も検討に入れており、尹東柱の詩作品の、世界文学の土俵での読解の可能性を大きく開拓している。

ただ、本論文全体においてキー概念となっている「倦怠」について、一般の用法との差異化をもっと厳しく行うべきであること、〈窃視〉から「白」への議論の展開にやや説得力が欠けていること、キリスト教、とりわけ青年期における信仰の危機の克服の問題や、同時代の日本文学との間テクスト性の洗い出しがやや不十分であること、等が指摘された。しかしそれらも、本論文全体の評価を損なうものではなく、今後の研究の展開に期待することにした。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士学位（文学）を授与されるに値するものであると判断した。